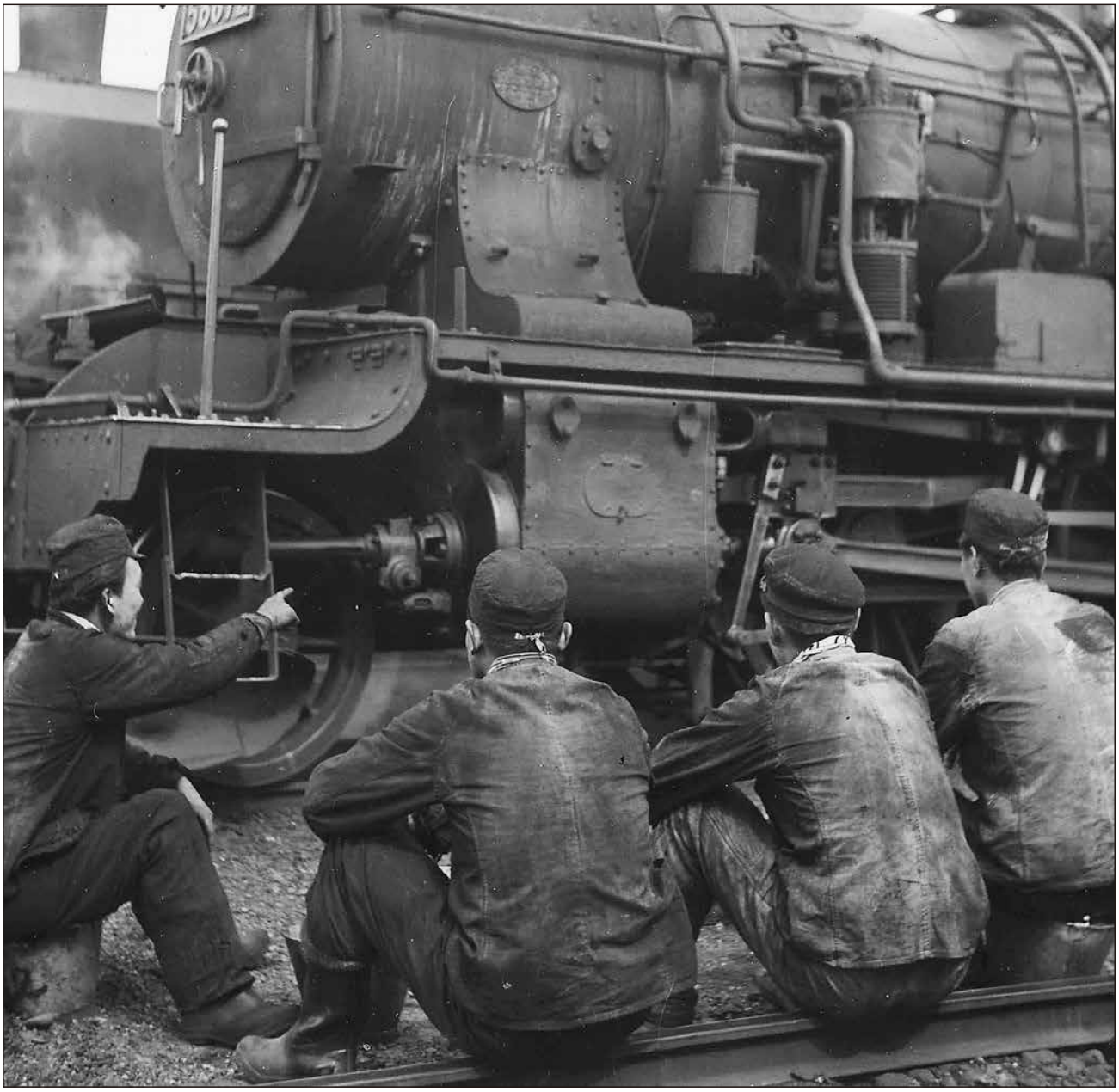
ISSN 2187－9591

Science Report of Kushiro City Museum

釧路市立博物館紀要

NO.426



2020.9

やっぱり釧路は我がふるさと

旧釧路博物館と聞けば、高齢者はひょうたん池時代の瀟洒な建物を思い浮かべるだろうが、実はその前に幣舞町出世坂上の釧路図書館と同居していたことがある。当時私は千歳町在の釧中生で、よく遊びに行ったものだ。館長は片岡新助と云う気さくな中年男だが、図書館長は佐藤直太郎と云う鶴のように細い長身の近ずき難い印象の人だった。

或る日訪れると、その片岡館長が館前で昨日阿寒町から寄贈されたと云う、とても大きなアイヌの木彫り丸木舟にゴリゴリ鋸を入れている。「館長何するんだ、こんなのデカイのはメッタにないぞ」「判ってるさ、でも入らないんだ、階段の吹き抜け天井が高いのでそこに縦位置でと思ったが途中の梁が邪魔だろ、だからその部分を切ってるのさ」「展示物に建物を合わせるなら判るが話が逆だ」「お前ならそう云うと思ったよ、横にする時はチャンとくっ付けるから心配すんな」。

一方図書館長はおっかない、ある時菊池寛作「藤十郎の恋」の借用申込書を出したら「チョット来い」恐々出頭すると「お前にはまだ早い、これを読め」と出されたのが「南総里見八犬伝」八巻の一。和紙の大型本で変体仮名「先生、難しくて私にはまだ読めません」。結果的に菊池寛は却下。長閑な時代だった。

一方、当家のオヤジは怒鳴ることが家長の仕事と勘違いしており、ウッカリ床の新聞を跨いだら「コラ！人が一生懸命作った新聞を踏む奴があるか」と一発飛んだ。本を読めと喧し云うけど、本を買ってくれたためしがない「ファーブル・昆虫記」「リビングストン・アフリカ探検記」読みてーな、仕方ないから南大通りの古本屋から一冊買ってきたら「誰が読んだか判らんものを汚い」。どうすりゃいいの。

そんな思い出一杯の釧路を離れて50年近くにもなるが、何故か今でもテレビを見て関係もないのに釧路の天気が気になり、今日も寒いななどと呟くのが日常だ。同じ釧路出身の友人に聞くと、オレもそうだと云うから、故郷ってそんなものなのかなとも思うのである。

釧路は将来、どこに軸足を置きどこに向かうのだろうか。あの英国ブリタニカ大百科事典戦前版の釧路紹介の記憶を辿ってみると「日本北部北海道の東に位置し人口は〇万人、主な産業は石炭、紙、漁業で石炭は海底炭と称し高カロリーでその坑道は領海外にまで達する。紙は新聞用巻取紙で苫小牧と合わせて日本の新聞用紙の百％、漁業は世界三大漁場の北洋地域で水揚げ高日本一を誇る。又芸術面でも高名の音楽家、画家などを多出する」と手放しの賛辞である。

現在の人口減少傾向は、釧路に限ったことではない。最近清涼な気候を売り物にスポーツ団体誘致も成功しているようだし、観光資源としての釧路湿原も極めて有望、アイヌ民族の遺跡も多く、手掛ける材料は豊富で事欠かない。地球温暖化も有効利用して観光産業開発、外客誘致に注力すべきだと思考する。

又、最近水産物加工食品の開発が進んでおり好感が持てる。本州のスーパーなどでは北海道産は別置き待遇だ。もう時効の話だが、昔和商市場が日曜休みなので観光客の為に開くべき、と在札釧路会で要望し続けたが、「セリがない」とか「店員保養」とかへ理屈を並べて、日曜開店まで３年を要した記憶がある。今はそんな消極的な人はいなく皆明るく元気、大声と百％の笑顔で外客を迎えているのは釧路人としてとても嬉しい。

これも時効の話だがもう一つ、昔、「来釧観光客が減ったのは美川憲一のせいだ」と云ったら、「どうしてだ」と聞くから「JRに『寝台急行まりも』があって夜９時頃釧路を出たろ、発車のときホームに流れる歌が美川の『釧路の駅でさようなら』だ、とても良いメロディーだが、さようならはいかん、『また来い』てなのに代えるべきだ。しかも急行なのにあまり早く終着札幌駅に着いても困るだろうと、新得で２時間程停車して時間調整する変な急行だ、急行料金返せ」。でもこんな苦情にJRは知らん顔だった。

でもみんなふるさと釧路を愛している証拠の話、そんな愛しい釧路大好き勝手連が各地に多数潜在していることを忘れないでほしい。

室内　昭三（元 釧路臨港鉄道）

９月号目次

やっぱり釧路は我がふるさと……室内　昭三　2
釧路湿原のイトウ復活に向けて……野本　和宏　3
収蔵庫で確認された明治期のシダ植物標本……加藤ゆき恵　5
2023年に向けた釧路湿原の鳥類調査について……貞國　利夫　6
釧路川の「渡船券」について……石川　孝織　7
郵便局×博物館の取り組み
～風景印・小型印、フレーム切手、サテライト展示～……石川　孝織　8
新型コロナウイルスによる臨時休館とSNSでの動画配信……加藤ゆき恵　10
チャランケチャシ……戸田　恭司・貞國　利夫　11
博物館ニュース……12

〈表紙写真〉　企画展「道東の鉄路～国鉄釧路機関区・酒井豊隆の記録～」展示作品より、「語らう庫内手たちの背中」。1955（昭和30）年５月・釧路機関区構内にて撮影。このたび釧路市立博物館では、元国鉄の酒井豊隆氏より、旧釧路鉄道管理局管内などで撮影された鉄道と沿線風景・地域産業、鉄道マンなどを写した作品約1,200枚（アルバム25冊）を受贈、展示のほか写真集（記録集）としてまとめ、９月に刊行しました。　（石川　孝織）

釧路市立博物館館報　№426　2020年９月号　2020年（令和2年）９月30日発行
発　行　釧路市立博物館　〒085－0822　釧路市春湖台1－7
☎ 0154－41－5809（博物館）・43－0739（埋蔵文化財調査センター）/ FAX 0154－42－6000
釧路市立博物館Web　http://www.city.kushiro.lg.jp/museum/
museum@city.kushiro.lg.jp（博物館）　maibun@city.kushiro.lg.jp（埋蔵文化財調査センター）
発行責任者　佐藤 志敦　　編　集　貞國 利夫・石川 孝織　　印　刷　㈱藤プリント